

## 知覚における無意識の概念を再考する

右田晃一

大阪大学人間科学研究科

本発表の目的は、心理学や認知科学、特にその中で知覚研究で用いられる無意識の概念の曖昧さ、つまり、個々の研究や文脈によって異なった形で使われている可能性があるという問題を指摘し、そこから心的表象という概念と関わる形で整合性のある無意識の概念を提出することである。

近年、意識において学際的な研究が進んでいる。しかし、科学者や哲学者において用いられる意識の概念の定義は論者によって違いがあり、曖昧性を残している。いや、定義自体が問題になるのである(Van Glick 2014 など)。そして、意識と密接にかかわる概念である無意識、‘un’consciousness は consciousness の否定形であり、人間の哲学的/科学的営みにおいては意識より後に用い込まれた概念である。それは歴史的にはヘルムホルツによって「無意識的推論(unconscious inference)」という形で提出され、他にも哲学者の著作においてその存在をほのめかす言説が存在したが、Freud が「再発見」したものとされる。現代ではフロイト流の精神分析的な無意識の概念は実験心理学や認知科学の分野ではほとんど用いられないが、フロイトが提唱した意識と無意識の中間にあって主体にとってアクセス可能な前意識(pre-consciousness)、James(1890)に影響を受けた Mangan(2001)の「周縁意識 (fringe consciousness)」といった概念を用いる論者も存在する。そういったことから無意識という概念にも混乱が見られるのである。

知覚研究における意識と無意識の関係については、実験者が実験協力者に呈示する刺激対象(ターゲット)の強さや持続時間に拠っている。つまり、それらの一定の値である「閾(threshold)」を境に、実験協力者がターゲットの内容などを報告できるかどうかで意識的な知覚か無意識的な知覚のどちらかが分かれるといった考え方が基本的である。しかし、意識と無意識の関係性についての考え方は大きく二つに分かれる。

Overgaard ら(2006)などは、意識は連続的(continuum)な性質を持ち、程度(degree)で捉えられると考えられる。また、それと並行して論者によっては無意識的な「知覚」は存在せず、後述する盲視においてもそれは「劣位の(degraded)」視覚だという(Phillips and Block 2017 など)。しかしながら、これらの実験・文献からは意識と無意識が連続的なのか、また、そうでない場合無意識はどう扱われるのか、が定かではない。他方、Sergent and Dehaene(2004)などは、意識と無意識は鮮明に、非線形的(nonlinear)、つまり二つ以上の閾で完全に二分できるという対照的な主張をしている。これらの見解の基となっている実験は異なるが、以下、それと関連する実験及び現象を記述する。

神経心理学的には盲視 (blindsight) や半側空間無視 (spatial hemineglect) といった脳損傷に起因する障害が存在する。前者は、第一次視覚野に損傷を受けた患者において一定の視野内のものが見えない (暗点が存在するという) にもかかわらず、その対象の位置を当てたり言語報告が出来たり、対象に働きかけたりすることができるなど、視覚情報処理能力が残

存していると思われる現象である。後者は片半球大脳皮質の損傷によって、その半球とは逆の視野(つまり、大脳右半球に損傷を受けた場合、左側。逆も同じ)にある刺激を「無視(neglect)」してしまう現象である。半側空間無視においても、その欠けている視覚情報処理能力が残存していると思われる実験結果が累積している。ただし、これらの解釈に当たっては、それが無意識的な「知覚」であるかが争われている(Peters, M.K.et al. 2017)。

神経的な障害を持たない一般人を対象にした実験的な手法としては閾下プライミングや逆行マスクングといわれる手法などがある。閾下プライミングとはその名の通り、前述の人間が知覚できない「閾」の下の刺激を与え、後の反応や行動を測定する手法であるが、逆行マスクングは逆に「見えていた」刺激(ターゲット)の後に、然るべき画像を呈示することで最初の刺激の知覚ができなくなる手法/現象である。ともに、ターゲットに関連した刺激を呈示してなんらかの反応を求めると、ターゲットに無関連な刺激よりもより速くあるいは正確に判断できることが示されている。これは後の刺激によってターゲットの知覚の視覚情報が「破壊される」という解釈はあるのだが、無意識的な処理がなされ後続の反応に影響を及ぼすということから、知覚領域における意識と無意識の関係において示唆的でもあるだろう。

実験の解釈上、困難な問題となるのが、両眼視野闘争(binocular rivalry)である。これは、両眼各々に別々の画像を継続的に示していくと、双方の画像が一定の時間間隔をもって、独立に意識に「現れていく」という現象である。この時、二つが別種類の刺激であるとき、その刺激に対応した脳内の別々の部位が活性化するという。この時、活性化していない領域に対応する刺激の知覚はどのような状態にあるのか。無意識的だと断言できなくても、少なくとも、主体にとって意識的な対象ではありえないであろう。

これまで、現象や実験手法・実験結果を羅列してきたが、ここで、本発表のこれらの事象や研究について無意識というのが一貫した概念であるかどうかを検討するための幾つかの指針を挙げておく。

第一に、「無意識」及び「無意識的過程(処理)」と分けてきたが、それらは実体・状態と過程とを暗黙裡に区分している。過程が存在し諸々の性質を持つ、それ故、実体も存在しそれらの諸性質を持つとする論法は正しいのであろうか。

第二に、これらの研究の多くにおいて「awareness(気づき)」や「注意(attention)」があるかどうか意識的かどうかのメルクマールとされているが、果たしてこの二つの概念は明確なのであろうか。これらの概念の妥当性を問うことで、無意識の概念の見直しが可能であると思われる。

最後に、Egan(2012)によれば、認知心理学やそれを含む認知科学における理論においては計算機的・情報处理的な考え方が採用され、表象(representation)や心的表象(mental representation)という概念を利用しないものはほとんどないという。その中で無意識的表象というものも存在することも認める論者が多い。そうすると、少なくとも知覚における無意

識的な過程というものは、無意識的な表象の(処理)過程という枠で考えた方が妥当であるように思われる。本発表では、無意識及び無意識的過程を表象の観点から見直すことも目的とするものである。